

中世東国における領主権力と地域社会

東北大学大学院文学研究科 歴史科学専攻

泉田邦彦

本論文は、戦国期の関東・奥羽における領主権力について、当該地域の史料上に特徴的に現れる「洞／うつろ」をキーワードに据え、領域支配の構造及び権力編成の実態を考察したものである。構成は以下の通り。

序章

- 一、東国の政治的枠組み
- 二、戦国期領主権力研究の現状と課題 ―国衆論を中心に―
- 三、東国の地域性 ―「洞」論の成果と課題―
- 四、本論文の課題と構成

第一部 室町・戦国期常陸の領主権力

第一章 一五世紀における佐竹氏権力と江戸氏・小野崎氏

- はじめに
- 一、一五世紀前期の佐竹氏「宿老」
- 二、一五世紀中・後期における江戸氏と「傍輩」
- 三、佐竹の乱と江戸・小野崎氏の「領」形成
- おわりに

補論一 「康応記録」の成立と伝来について ―戦国期佐竹家中の系図類作成に関する一考察―

- はじめに
- 一、写本の分類
- 二、「康応記録」の原型の成立について
- 三、中世における写本作成とその背景
- おわりに

第二章 佐竹天文の乱と常陸国衆

- はじめに
- 一、部垂の乱再考
- 二、天文後期の佐竹・江戸抗争
- 三、天文の乱以降の常陸国衆

おわりに

第三章 戦国期常陸江戸氏の領域支配とその構造

はじめに

一、江戸領の領域とその様相

二、常陸江戸氏の領域支配

おわりに

補論二 戦国期佐竹氏権力と流通 ―過所と荷留の事例から―

一、常陸沿岸の水運と流通

二、佐竹氏の過所

三、佐竹「洞」の荷留

第四章 常陸における絹衣相論の展開と江戸重通

はじめに

一、天正年間以前の絹衣相論と常陸

二、江戸氏と水戸真言宗・天台宗の再検討

三、絹衣相論と江戸重通

おわりに

第二部 室町・戦国期南奥の領主権力

第五章 一五世紀における岩城氏の内訌と惣領

はじめに

一、岩城氏内訌に関する先行研究の問題点

二、岩城清隆・隆忠と内訌

三、岩城氏惣領の内実

四、一五世紀後半の岩城氏と地域秩序

おわりに

第六章 岩城氏権力と所務相論 ―南奥における戦国期権力の形成と展開―

はじめに

一、室町期の岩城氏と一族

二、戦国期岩城氏と所務相論

三、一六世紀後半岩城氏権力の変質

おわりに

補論三 相馬氏の戦国期権力形成過程 ―標葉氏滅亡との関わりから―

- 一、本章の目的
- 二、一五世紀の標葉一族
- 三、標葉一族の相馬氏への内通
- 四、標葉氏の滅亡
- 五、戦国期相馬氏の権力編成と支配領域

第七章 天正期岩城常隆の発給文書と花押 ―南奥領主の「内」 と 「外」 ―

- はじめに
- 一、岩城常隆の政治的動向
 - 二、常隆発給文書の古文書学
 - 三、常隆の「内」 と 「外」
- おわりに

第八章 戦国期岩城氏の領域支配構造と「洞」

- はじめに
- 一、岩城氏の支配領域
 - 二、中山氏と在地社会
 - 三、猪狩一族と在地社会
 - 四、岩城氏と寺社勢力
- おわりに

終章 中世東国における領主権力と地域社会

- 一、本論文の成果
- 二、中世東国の領主権力を捉え直す

序章

本論文では、戦国期の関東・奥羽における領主権力について、当該地域の史料上に特徴的に現れる「洞／うつろ」をキーワードに据え、領域支配の構造及び権力編成の実態を明らかにすることを目的とする。考察の対象は、室町・戦国期（一五・一六世紀を主とする）とし、関東では常陸江戸氏及び小野崎氏を、奥羽では南奥岩城氏を取り上げる。

対象時期を室町・戦国期に設定するのは、当該期の研究は時代間の橋渡しがなされておらず、時代を超えた視点から領主権力の変質を見通す視点が不十分な現状が挙げられる。近年の研究においても、室町期から戦国期への領主権力の変質／転換は十分に言及されておらず、戦国期権力がどのような過程を経て形成されてきたのか、前代までの在り方とはどのように異なるのか、未だ検討すべき課題が多く残されている。

また、関東と奥羽という二つの地域の領主権力を検討対象に据えたのは、明德二年（一三九一）に奥羽が鎌倉府の管轄に入り、関東とともに「東国」として把握し得る政治的枠組みが形成されたこと、史料上「洞」が頻出することが挙げられる。市村高男氏によれば、「洞」とは、一五世紀末から一七世紀初頭にかけての東国でみられる特有の結合原理であり、「[屋形]・惣領を頂点として、その統制下に属しつつも、私「縁」や契約によって結集した一族・旗下国人層による一種の共同体」という、戦国期特有の権力編成と理解される（市村高男『戦国期東国の都市と権力』思文閣出版、一九九四年ほか）。このような共通性があるものの、従来の研究では、両地域にまたがる視点から当該期の領主権力を考察する姿勢は希薄であった。

そこで序章では、戦国期の関東・奥羽における領主権力研究を整理し、研究上の問題点を明らかにするとともに、本論文における課題を提示した。特に、市村高男氏の「洞」論、黒田基樹氏の国衆論（黒田基樹『増補改訂 戦国大名と外様国衆』戎光祥出版、二〇一五年ほか）に着目し、両者の論争を取り上げながら、それぞれの論の成果と課題を確認した。その上で、本論文の課題を以下のとおり設定する。

- ①戦国期の領主権力が如何なる過程を経て形成されてきたのか、「戦国期特有の所産」と評価される「洞」が如何なる過程を経て編成されてきたのかについて、室町期の在り方を踏まえて考察する。
- ②国衆論で明らかにされてきた領主権力の権力構造を踏まえ、支配基盤である村落を視野に入れながら、「洞」を基盤とする領主権力の領域支配及び権力編成を考察する。
- ③従来、家中・分国と言い換えられてきた「洞」の実態を明らかにするため、特定の領主権力を主軸に据え、「洞」に対する認識を考察する。
- ④北関東の領主権力を主な事例として立ち上げられてきた「洞」論を再評価するため、南奥の領主権力と比較することで相対化を図る。

上記の課題を解決するため、第一部では、常陸江戸氏及び小野崎氏を取り上げ、従来の「洞」論を深化させていく。第二部では、陸奥国大館城主岩城氏を取り上げ、従来の「洞」論の相対化を図る。

第一部 室町・戦国期常陸の領主権力

第一章 一五世紀における佐竹氏権力と江戸氏・小野崎氏

一五世紀に佐竹氏の宿老と位置付けられていた江戸・小野崎・小貫三氏の動向から、当該期の佐竹氏権力内部の状況を明らかにし、江戸氏・小野崎両氏の国衆化の画期を捉え直す。さらに、佐竹氏の戦国期権力化の過程における権力内部の状況を明らかにすることで、戦国期特有の権力編成＝「洞」がどのように成立したのかを論じた。

一五世紀段階の江戸氏・小野崎氏は、佐竹氏の権力機構の中枢に位置する「宿老」であり、佐竹氏のイエ権力＝「洞」を構成する「傍輩」であった。佐竹の乱において佐竹氏や一族の所領を押領しながら、独自の「領」を形成した江戸氏・小野崎氏は、佐竹氏との従来の関係を克服し、領域権

力（国衆）として自立していった。一方、同じく宿老の立場にあった小貫氏は、佐竹の乱に江戸氏・小野崎氏による所領の押領を受け、領域権力として自立することは叶わず、一六世紀を通じて佐竹氏宿老の立場を保持するに至った。

国衆として自立した江戸氏・小野崎氏の動向を受け、佐竹氏は江戸氏に「一家同位」の家格を付与するなど、自己を中心とする秩序の中に再び位置づけようと試みた。これによって、元来の「洞」構成員であった江戸・小野崎両氏は、佐竹氏による秩序再編の動きのなかで、以前とは異なる立場で佐竹氏権力の外縁部に位置づけ直された。戦国期特有の「洞」という権力編成は、佐竹氏による秩序再編の動きのなかで形成されたのである。

補論一 「康応記録」の成立と伝来について—戦国期佐竹家中の系図類作成に関する一考察—

中世後期の佐竹氏家臣団を考察する際、先行研究において分析対象として用いられてきた「康応記録」という記録がある。同史料は引用の頻度に比して、史料性格の検討が不十分であった点に課題があった。そのため、その写本を可能な限り収集し、奥書及び記載内容の分析から史料性格の解明を試みた。

検討の結果、「康応記録」は佐竹氏の宿老を務めた小野崎道宝入道の系統によって作成され、その原型は小野崎道宝入道が養子小野崎筑前守に譲渡した一五世紀後半頃に成立したこと、その後、小野崎筑前守が小貫筑前入道と名乗りを改めた後、永正一四年に内容を書き足したものを、「御当家系図」とともに舍弟小貫式部大輔に相伝したことを明らかにした。また、天文年間以降、佐竹家中の間で「康応記録」の写本とともに、系図類を書き写す動きが生じていく。これは、第二章で論じるように、佐竹天文の乱を経て佐竹氏が家中・「洞中」との関係を再編したことに対応する動きであると考えられる。

第二章 佐竹天文の乱と常陸国衆

享祿二年に始まる部垂の乱から佐竹義昭と江戸忠通との抗争が終結する天文二〇年までの内訌を取り上げる。本章では、この内訌を「佐竹天文の乱」と把握し、その前後の佐竹氏と常陸国衆との関係の変化を考察した。

佐竹天文の乱は、佐竹の乱を経て佐竹氏から相対的に自立した常陸国衆、佐竹氏と所領をめぐって課題を抱えていた南奥の岩城氏・白川氏を巻き込み、常陸・南奥・下野の政治的動向が複雑に絡み合いながら展開したものであることを論じた。佐竹天文の乱を経て、佐竹氏は常陸北部の一族・国衆との関係を調整し、南奥・下野へと勢力を拡大していったが、その過程で周辺領主を取り込みながら佐竹「洞中」を再編していった。補論一で論じた「康応記録」写本や系図類の写本作成が当該期に進んだのは、佐竹本宗家を中心に権力編成が再編され、書札札の整備が進んだことと大きく関わることがより明確になった。佐竹氏の権力編成は、天文の乱を契機として大きな転換を迎えたことを明らかにした。

第三章 戦国期常陸江戸氏の領域支配とその構造

佐竹氏よりも下位に位置する江戸氏（B型「洞」の盟主）を分析対象に据え、領域支配の実態を考察した。考察にあたっては、江戸氏が従属下においた村落を基盤とする給人・土豪層（市村氏の区分でいうC型「洞」を編成する層）に焦点を当て、「洞」を基盤とする領主権力と村落との関係を見通す。

江戸氏が従属下においた村落を基盤とする給人・土豪層は、江戸氏進出以前から在地に根を張っていた「武」を職能とする者たちであった。江戸氏は、彼らを被官化する際にその相伝所領を給分化し、従来通り在地支配を認め、彼らを介して軍勢動員や年貢収取を実現し、在地社会の掌握を図っていた。そのため、村落・百姓宛文書を直接発給して在地社会の掌握を図ったわけではないことを論じた。すなわち、「洞」を基盤とする北関東・南奥の領主権力は、在地社会のコミュニティの中核をなした給人・土豪層を自身の従属下に編成し、既存の枠組みを活かした形で領域支配の実現を図っていたのであり、村落・百姓をも射程に入れた支配を行っていたのである。

補論二 戦国期佐竹氏権力と流通—過所と荷留の事例から—

過所と荷留の事例を分析し、佐竹氏及び佐竹「洞」に編成された国衆がどのように領域支配を実行していたのか、「結城氏新法度」の条文を踏まえながら考察を行った。本論は、交通・流通の面から、佐竹氏と「洞中」との関係を補足的に述べたものである。

過所については、佐竹氏当主及び佐竹東家が自身の支配領域に対し、あるいは領外から領内への流通も保障するものを発給したことを確認し、佐竹「洞」に編成された国衆領に対する発給事例は確認できないことを指摘した。また、荷留については、「洞」に編成された国衆らがそれぞれの支配領域における政策として実施していたことを指摘した。これらのことから、佐竹氏や結城氏ら「洞」の盟主は「洞」全体の流通を掌握していたわけではないことを論じた。

第四章 常陸における絹衣相論の展開と江戸重通

一六世紀半ば頃、常陸の天台宗・真言宗間で絹衣着用をめぐる相論が発生した（絹衣相論）。相論は常陸の天台宗が朝廷に訴え出るなど、常陸国内のみならず、北関東の諸寺院、京都の本寺、朝廷や織田信長を巻き込んで展開した。この相論について、常陸国水戸城主江戸重通と常陸における天台宗・真言宗との関係から再検討を行った。

従来は絹衣相論の構図を、水戸真言宗と手を結んだ江戸氏が水戸天台宗の追い落としを図ったものと理解されてきたが、再検討の結果、江戸重通は天台・真言両宗の大檀那であり、天台宗の追い落としを図ったわけではないこと、重通は中人の立場から相論に臨んでいたことを明らかにした。絹衣相論は、常陸真言・天台両宗の争いに端を発したが、当該期の天台・真言両宗の本寺は地方の末寺の動きを統制しきれておらず、本寺も関与しながら相論の解決が図られたものの、末寺の宗派間の対立の解消には至らなかった。また、朝廷に持ち込まれた相論は、中央権力による裁定を受けたものの、最終的に常陸における真言宗の絹衣着用は止まなかった。相論を解決させるには、綸旨の発給のみならず、当該地域の領主権力による「裁断」が必要だったことを指摘した。

江戸重通は、相論において中人の立場に立ち、双方の「和融」を目指し、一方の非を「裁断」し

なかった。そのため、真言宗の絹衣着用は続いたのであった。このことについて、江戸重通は、領内に軋轢を生じさせず、両宗を和睦させるため、中人の立場から相論に臨んだものと評価した。

第二部 室町・戦国期南奥の領主権力

第五章 一五世紀における岩城氏の内訌と惣領

一五世紀の岩城氏は、惣領と庶子による大規模な内訌を経験し、室町期から戦国期へと権力を転換していったことが先行研究で指摘されている。しかし、先行研究では当該期の惣領の系統の理解や内訌の捉え方について疑問を感じる点も少なくない。そのため、本章では、一五世紀における岩城氏内訌を再検討し、当該期の惣領の地位・権限を明らかにするとともに、内訌を経て惣領の内実がどのように変質したのかについて考察を試みる。加えて、岩城氏が従来の知行地である岩城郡を越え、岩崎・檜葉両郡、菊田庄へと支配領域を拡大していく過程を分析し、戦国期の岩城氏権力がどのように編成されていったのかについて展望を述べた。

従来の研究では、岩城氏惣領について、一四世紀には周防守系岩城氏であったが、一五世紀には岩城氏庶流白土氏＝下総守系岩城氏に移り、周防守系岩城氏は岩崎氏惣領を継承した、と理解してきた。しかし、再検討の結果、岩崎氏は独立した国人として存在していたこと、岩城氏惣領は南北朝期以来一五世紀前半まで周防守系岩城氏であり、一五世紀半ばの内訌を経て、下総守系岩城氏が台頭し、惣領家が入替わったことを明らかにした。

また、周防守系・下総系岩城氏の発給文書の分析から、一五世紀半ばまでの岩城氏惣領（周防守系岩城氏）が有していた権限は、岩城一郡に対するものだったのであり、一五世紀後半以降、支配領域が拡大していく段階において行使し得た権限とは性質が異なることを指摘した。一五世紀後半に新たに台頭した下総守系岩城氏の隆忠・親隆父子は、周辺領主との抗争を通して地域秩序を再編し、岩城郡にとどまらず、岩崎・檜葉両郡や菊田庄で構成される一定規模の領域を支配する領域権力として立ち現れてきたことを論じた。

第六章 岩城氏権力と所務相論—南奥における戦国期権力の形成と展開—

前章の成果を踏まえ、室町・戦国期の岩城氏を事例に、南奥における戦国期権力の形成と展開について考察する。戦国期岩城氏権力を捉え直すため、所務相論に着目し、その解決方法から室町期と戦国期との権力の相違を明らかにする。あわせて、従来の奥羽戦国史研究で想定されてきた、郡守護の権限拡大による戦国期権力の成立という理解の再考を試みた。

一四世紀後半～一五世紀前半の周防守系岩城氏は、室町幕府—奥州管領体制あるいは室町幕府—篠川公方体制の下、一揆同心した岩城一族や近隣領主の支えを得ながら「岩城郡」内の所務相論へ対応していたことを明らかにした。それに対し、一五世紀後半以降の下総守系岩城氏は、勢力を拡大していく過程で、従来の郡・庄単位の領域及び近隣領主との関係を再編しながら、初代隆忠を起点とする新たな秩序を形成していった。戦国期の岩城氏権力は、一族間・村落間紛争を調停する公

権力として存在し、ここに、在地の諸問題の解決を「頼む者」として中小領主が岩城氏の旗下に属することとなり、家中や「洞」中が形成される契機となったという見通しを示した。

また、従来の研究では、一五世紀の「郡守護」の権限を重視しながら戦国期権力の成立を論じてきたが、戦国期に形成された「郡（領）」は領主権力が勢力拡大の過程で新たに形成した支配領域であり、「郡守護」の職権に基づく領域支配がなされたわけではないことを論じた。そのため、戦国期に新たに形成されてきた「郡（領）」を治める領主権力のことを、室町期と異なる権力として捉える必要性から、「郡主」として把握すべきことを提起した。

補論三 相馬氏の戦国期権力形成過程—標葉氏滅亡との関わりから—

第五・六章では岩城氏の事例から、南奥における戦国期権力の形成過程を考察したが、その成果を南奥領主のモデルと位置づけるため、相馬氏の事例からも同様の考察を行った。相馬氏の戦国期権力化の契機として、隣接する標葉郡を治めた標葉氏を打倒し、同郡を支配下に置いたことが想定されており、その前後における相馬氏の動向に注目する。

検討の結果、標葉氏滅亡前後の相馬氏は、標葉氏重臣を自己の支配下に組み込む際に、彼らに一字偏諱あるいは「一家」等の家格を付与し、旧来の知行地の支配体制をそのまま認可しながら、相馬氏惣領を中心とする秩序下に位置づけていったことを明らかにした。一五世紀末以降、相馬氏は従来の支配地である行方郡を越え、標葉郡・宇多郡へと勢力を拡大し、戦国期特有の相馬郡（相馬領）を形成していく。相馬氏の場合も岩城氏同様、周辺領主との関係を再編しながら、戦国期特有の権力編成と支配領域を形成したことを論じた。

第七章 天正期岩城常隆の発給文書と花押—南奥領主の「内」と「外」—

天正期の岩城氏当主である、岩城左京大夫常隆の発給文書を網羅的に収集し分析を試みた。常隆は、受給者との関係で二系統の花押を使い分けしているが、その基準は如何なるものだったのか。常隆の花押の使い分けを明らかにするとともに、発給文書の内容を分析することで、他領主発給文書を相対化し、戦国期南奥領主の「内」と「外」に対する認識を考察する。

まず、常隆の花押の使い分けには明確な意思が存在し、常隆が「内」と認識した者（家中）には私用花押を、「外」と認識した者には岩城一族であっても公用花押を用いたことを指摘した。重要なのは、船尾氏・車氏のように「内」から「外」へと立場を変えた岩城一族の存在であり、彼らは他家に従属しながらも「重縁」かつ「累代之一味中」として岩城氏権力の外縁部に位置づけられていたことを明らかにした。岩城氏は、血縁関係・擬制的血縁関係を媒介とした同族結合の意識の下、旗下領主を緩やかに権力編成の一端に位置付けていたのである。家中ではないが、他家でもない存在を、同族結合の論理の下に編成していたのが岩城氏の「洞」の実態だったのである。

第八章 戦国期岩城氏の領域支配構造と「洞」

「洞」という権力編成に着目しながら、岩城氏の領域支配の実態を明らかにする。岩城氏の支配基盤を構成するのは、岩城氏直轄領、給人領、寺社領である。そのため、岩城氏と給人層（旗下領

主) 及び寺社との関係に焦点を当てていく。給人層が在地において一族や周辺領主とどのような関係を形成していたのかを明らかにしながら、岩城氏と村落との関係を分析する。加えて、戦争という非常時において、岩城氏がどのような論理をもって旗下領主・寺社の軍勢動員を実行していたのかについて明らかにし、「洞」を基盤とした領主権力の在り方を考察する。

検討の結果、岩城氏の権力編成としての「洞」は、村落を基盤とした一族・給人層を自身との関係を基軸に位置づけた「イエ」権力であることを明らかにした。それは、岩城氏が一五世紀前半における「岩城氏惣領」をめぐる内訌を克服する過程で、有力勢力と同心関係を結び、あるいは縁者として自己の権力編成に位置づけながら、地域秩序を再編し形成したものであった。岩城氏権力は、在地を基盤とした一族・給人層を通じて、周辺の民衆を動員するとともに、村落への役賦課を実行し、領域支配を実現していたのである。

一方、岩城氏権力は、一族・給人層を権力基盤とし、平時においては寺社領の民衆を合戦に動員することはなかったが、岩城領の全域が戦争という非常事態に直面し、その存続が危ぶまれると、領内全体の民衆を動員するための論理を持ち出したことを指摘した。すなわち、岩城氏の「イエ」の維持が領内の村落・寺社の存続と一体であることを強調し、領国全体の構成員を地域防衛に動員しようと試みたのである。これが岩城氏の「イエ」を領国全体と表裏一体のものとする、非常時に持ち出された「うつろ」維持の論理であることを論じた。

終章 中世東国における領主権力と地域社会

本論文の成果を踏まえ、中世東国の領主権力を捉え直す。本論文で明らかにしたことを、(一) 戦国期における領主権力の秩序再編と「洞」、(二) 戦国大名・国衆と郡主との関係、(三) 「洞」論の再構築、の三点からまとめておく。

(一) 戦国期における領主権力の秩序再編と「洞」

公権力が現地から消失した南奥では、一五世紀後半以降、領主間紛争が顕在化していった。郡規模の領域を支配した旧族領主層は、周辺領主を打倒し、あるいは従来との関係を再編しながら、室町期とは異なる新たな支配領域及び権力編成を形成していった。この過程と実態は、第二部において岩城氏及び相馬氏の事例から示した通りであり、イエの惣領を中心に地域秩序を再編しながら、「洞」と呼ばれる族縁的性格が強い権力編成が出現した。

常陸では、一五世紀末から一六世紀初期の佐竹氏本宗家と庶流山入氏との内訌の過程で、従来は佐竹氏権力の中核に位置づけられていた江戸氏・小野崎氏が国衆として自立していった。佐竹氏は、自己を中心とする秩序・権力編成の一端に彼らを位置づけ、天文期の内訌の過程で秩序を再編しながら、「洞」という権力編成を維持していく。

戦国期常陸・南奥における領主権力は、「洞」を基盤とした権力編成に基づき、戦国期特有の支配領域の統治を実現していた。彼らの領域権力(戦国大名・郡主・国衆)としての権力構造は、地域秩序の再編を経て、新たに形成された支配基盤としての郡・領、及び権力基盤としての家中・「洞中」で構成されていたといえる。それは、惣領・屋形を中核とするイエ＝族縁の論理に基づく権力の在

り方であり、室町期以来の公権力の存在を後ろ盾に成立した権力体ではなかったのである。

（二）戦国大名・国衆と郡主

室町期の領主権力（国人）と区別する必要性から、領域権力として自立した戦国期の領主権力を概念化するという点は、多くの論者が認めるところであろう。実際、北関東における領主権力の関係を戦国大名・国衆で把握することに大きな問題はみられない。問題となるのは、南奥における戦国大名・国衆と郡主の概念を如何に理解するかということである。

黒田基樹氏は、戦国大名と国衆は本質的に同質の領域権力であるとし、両者を分かつ指標を従属しているか否かという点に求めた。この理解に従えば、ほとんどの南奥領主は戦国大名として把握できる。ただし、戦国末期に至ると南奥領主の多くは伊達氏や佐竹氏に従属していくから、支配領域の規模にかかわらず、従属以前の彼らを戦国大名、従属以後の彼らを国衆と捉えることになる。そう理解した場合、規模の問題のみならず、戦国大名・国衆間の家格の問題も捨象されてしまう点は気にかかる。常陸の場合、戦国大名佐竹氏とそれに従属していた国衆江戸氏・小野崎氏との間には、書札礼（家格）上の明確な差が存在しており、東国全体の共通議論としていくには、この点も整合的に把握していく必要がある。

南奥領主の家格について、書札礼からみていくと、伊達・岩城・蘆名・白川・田村・二階堂・石川・相馬氏らは他の国衆層よりも上位に位置づけられていたことは明らかである。よって、戦国期の彼らを把握するには、室町期の国人や、他氏に従属することで領内の安定を図った国衆とは異なる概念を用いる必要があると考える。本論文では、小林清治氏の提起した「郡主」概念（小林清治『戦国期奥羽の地域と大名・郡主』岩田書院、二〇一八年ほか）を再検討し、家格の問題と実態を踏まえた上で、戦国大名と郡主を同グループで把握することを提起した。

鎌倉時代以来、守護不設置だった奥羽では、守護に准ずる存在だった「屋形」を称した有力国人たちが、室町幕府や鎌倉府などの上位権力によらず、一五世紀後半以降に領域権力として自立していく。その結果、戦国期には同等の家格を有する戦国大名・郡主たちによる政治秩序が形成されたという理解を示した。

（三）「洞」論の再構築

本論文の検討を通して明らかになったのは、「洞」と「他家」とは明確に区別され、そこには血縁関係・擬制的血縁関係を媒介とした同族結合の意識が存在したということである。「洞中」は当主との重縁関係を有し、「累代之一味中」と認識され、「味方中」＝「他家」とは異なる存在として位置づけられていた。他の領主権力に従属していたとしても、「他家」とは呼べない「ウチ」の存在、それが「洞中」であった。他の領主権力に従属せず、当主と主従関係にあった「家中」に対し、「洞中」はよりも広い範囲を指し、当主との従属関係は緩やかなものだった。この点は、毛利氏の「洞」を分析した村井良介氏の見解とも共通し（『科研費若手研究（B）「戦国大名分国およびその周辺地域における領域支配の研究」成果報告書』研究代表者・村井良介、二〇一七年）、不均質で未制度な状況や、流動性を残している点に戦国期の権力構造の特質を見出すことができる。

「洞」を基盤とする領主層の論理についても言及した。すでに北関東の事例から、「洞」を基盤とする領主層が人的つながりを重視した領域形成・維持の論理を用いたことは指摘されている。それ

に加えて、本論文では、岩城氏の事例から、南奥では「洞」の存続が危ぶまれた際、イエ権力の存続と領国全体の存続とが表裏一体の関係であることを強調し、その維持を図る論理（「うつろ」維持の論理）が持ち出されたことを見出した。この点について、従来は慶長五年（一六〇〇）頃を境に史料上消失すると捉えられていた「洞」が、近世相馬中村藩では使用されていることを踏まえて考察を展開した。すなわち、近世相馬氏の「洞」は、藩領の意で使用され、イエと支配領域とが一体のものとして捉えられており、戦国期に重層的に存在した「洞」はA型「洞」を編成した領主のイエの論理に一元化する指向性を見出すことができる。よって、戦国期に多様な在り方をみせた「洞」は、最終的に領主権力のイエを表わすものへと集約されていくという展望を示し、「洞」の終焉に対する新知見を提示した。